
書 評・紹 介

フランツ・グザファー・カウフマン著 原俊彦・魚住明代訳

『縮減する社会—人口減少とその帰結—』

原書房, 2011年6月, 285p.

本書は Franz-Xaver Kaufmann (2005) *Schrumpfende Gesellschaft: Vom Bevölkerungsrückgang und seinen Folgen* の全訳である。それに、著者であるカウフマン教授による「日本の読者へ」と訳者による「解説」が加えられている。内容は幅広く、扱う情報量が多い。しっかりと向き合わないとすぐに挫折してしまいそうである。著者のカウフマン教授は1932年スイスのチューリヒ生まれ、1969年より定年までドイツのビーレフェルト大学の社会学部の教授であった(1997年以降は名誉教授)。学部の web サイトによると、専門は社会政策理論、福祉国家論、社会政策史、家族政策、宗教社会学、主な単著が14冊もある。人口についても早くから関心を持ち、1957年から1958年にフランスの国立人口研究所に留学し、当時所長であったアルフレッド・ソーヴィの指導を受けている。1980年にビーレフェルト大学に人口・社会政策研究所を自ら設立し、1992年まで所長を続けた。ただし、上記14冊の著書のうち、人口に直接関わるものは本書のみであり、他は社会政策、福祉国家、宗教、家族に関する本である。

本書は以下の8つの章から成っている。「1章：成長は縮減より容易である」、「2章：人口学的展望」、「3章：人口減少は経済発展を脅かすか?」、「4章：人口減少の社会的影響」、「5章：後継世代の不足、その歴史的条件と動機」、「6章：政策的展望」、「7章：世代間関係と社会国家」、「8章：結びにかえて：2冊のベストセラーについての覚え書き」。1章と8章を除くと、前半の2～4章、後半の5～7章の2つに分けられる。

前半について、2章ではドイツの将来人口推計について、仮定値とともに、人口総数、年齢別人口、従属人口率等が紹介され、人口減少が避けようのないことだと述べられている。3章は人口減少がもたらす経済的側面を論じ、人口減少下では1人当たり所得の増加はむしろ難しいこと、生産性の向上のために「人的資産」という概念が重要なこと、移民の流入は社会的統合コストを考慮すると、それほど大きな経済的効果が見込めないことなどが指摘された。4章は人口減少がもたらす社会的側面を検討している。人的潜在能力が議論され、人口減少による社会的対立の激化が懸念されている。

後半の5章では1965年以降の「第二の出生減退」について数字を挙げて説明するとともに、ドイツの現行制度は子どもを持たない人に有利であり、出生減退は必然的であることを強調している。6章はドイツにおける人口「政策」の困難さについて、歴史的側面、制度的側面から論じている。7章では、三世間契約(世代間の再分配システム)の義務を1950年以降の出生者が果たしていない(そもそも個人がその義務を果たすシステムになっていない)こと、とくに生涯無子の著しい増加により、世代間の総扶養負荷のバランスが悪化に向かっていることを指摘し、現行の賦課システムから拠出金システムへの移行による解決策を提案している。

最後の訳者による「解説」は本書で挙げられたドイツの将来人口の数字に対応する日本の数字が丁寧な説明と共に述べられており、この「解説」は本書の理解に大きな助けとなる。

本書はカウフマン教授が人口と社会政策についてこれまでに書いてきた論文の集大成にあたるものであろう。内容が多岐に渡り過ぎるような印象も少なからず受ける。翻訳は大変な仕事であったと思われる。翻訳者のお二人の先生に深く敬意を表したい。ドイツ(と日本)の人口減少の帰結を考える際には大変参考になる本である。他分野の研究者と議論したい人口学研究者、人口に関心のある経済学、社会学、社会政策の研究者にとって、本書は、手強いが向き合う価値のある本である。一読をお薦めしたい。

(中川聡史)